ヨーロピアンポーセリンの旅

vol.2 ≪セーブル窯≫ Sèvres

18 世紀のフランス製陶で最も重要な役割のセーブル窯はヨーロッパ宮廷史そのものといっても過言ではないでしょう。フランス王政の最盛期、ブルボン王朝を飾りたてたポーセリンは、どのようにヨーロッパを風靡していったのでしょう。

マイセンの双剣マークには技術が外に漏れないよう守るという意味もあったようですが、その秘法はウィーンへと流れ、その後パリの北 50 キロに位置するシャンティイ（Chantilly）からヴァンセンヌの古城へと伝播（でんぱ）されました。（Vincennes、1738 年創立）この窯をフランス王立製陶所とし、現在のセーブルに移転させた仕掛け人が、ルイ 15 世の寵妾（ちょうしょう）ポンパドゥール夫人です。彼女はブルジョワ出身ながら、その知性と教養で 24 歳で公爵夫人にまでのし上がり、権力を欲しいままにしました。パリのサロンやベルサイユ宮殿では、ヘアー・スタイルからワインに至るまで、流行の担い手として大きな影響力をもっていました。それまでのベルサイユ宮殿は、太陽王ルイ 14 世が権威と礼儀を重んじ、複雑な礼儀作法に明け暮れていましたが、王の死後荘重で力強いバロック様式から自由で軽やかで曲線の多いロココ様式へと移り変わっていました。芸術に対する深い理解としたたかな野望の二面性を持つポンパドゥール夫人が、ここに目をつけないわけがありません。1768 年、リモージュ近郊でカオリン（磁器の原料となる粘土、白陶土）が発見されると、軟質磁器から金銀を上回る価値の硬質磁器へと質を転換させ、夫人は惜しみない援助をセーブルに注ぎ込み、磁器制作を躍進させベルサイユ宮殿を飾りたてたのです。

官能的で豪華なロココ様式を特徴とするセーブルには、白磁自身の白地を窓のように残し、そこに草花や雅宴図などを描き、周りを金彩で縁取りしたものが多く見られます。また、セーブルの代名詞ともいえる『王者の青』（bleu de roi）と呼ばれる深みのある宝石のような青は、熟練した職人たちの手にかからなければ表れない色です。

『ローズ・ポンパドール』（rose Pompadour）―― 夫人の名前までついた彼女のお気に入りのピンク色。このピンク色の可憐で清楚な飾り器の蓋を開けると、社交界で王侯貴族らが一心に注いでいたマイセンへの羨望のまなざしをセーブルに向けさせ、『ロココの華』として政治にまで関与するほどになった夫人の高らかな笑い声が聞こえてくるようです。